

(1) 1992年11月30日

燎 原

第85号



美 山 に て

奥 田 修 三

## 農民運動散歩記(二)

品角一郎  
(遺稿)

### 野間村のこと

この「農民運動散歩記」は、

故品角一郎氏(一九一一~一九八一年)が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。

品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になっている(この研究会の成果

は、京都府農地改革史編纂委員会編『京都府農地改革史』一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているよう

な事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまっていいたために、関係者から当時の農民運動の状況についても聞き取りを行ったことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかるようになった事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期(一九四五~五〇年)の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

(立命館大学教授 大蔵輝雄)  
(九二・九・二〇稿—再録)

この野間村について、この秋、京都民報で弥栄町<sup>トヤマ</sup>碇にスイス村が完成し、牛の放牧場ができたと報道された。この記事をみて私は本当にうれしく感慨深くその記事を読んだものである。

私が、野間村に農民オルグとしてよく行った頃、座談会に参加する村の青年から幾度ともなく、こんな土地の狭い村では何もできないと、絶望的な話をよくきかされた。それに、私は土地が狭いからこの村はダメだと結論を出すのは早計だ、この村の炭は有名だ、質も上等だ。茶道にはどうしても上質の炭が必要だから、上質の野間炭をドシドシ生産すべきだ。また、全山そばの花が咲くほどにそばが収穫されている。このそばを大量に栽培し、それを都会だけでなく、近くの峯山、宮津、豊岡、城崎などの各駅で売り出して行ける可能性がある。また、野間の牛は非常に優良だとせり市でもほめられている。その牛を飼育する放牧場を建設することも可能だ。この村の碇部落とか隣村の上世屋などは地理的にも最適 土地ではな

いか。政治を変えることも、重要なことだが、農民自体が、自分の住んでいる故郷を、農村を新しく生産農村に変えて行くことも重要なことだと、よく話したものである。それに就いて青年は、それでは米の自給自足もできなくなるが、米はどうするのだと質問があった。私は米は他村から輸入すればよい。そのかわりに、他町村にない物資をこの村から輸出すればよいのではないかと話した。こんな夢物語をしていた頃から既に三〇年余りすぎてしまった。最近碇に牛の放牧場が完成したことを新聞で知つて、実にたのしい思いをするのである。

おらの在所(故郷)は  
そばどころ  
嶺のうえまで  
花が咲く  
峠越えれば  
日本海  
いろいろ囁んでそば餅たべて  
孫の子守にうすの音  
峠越えれば織機の音  
このうたは、以前に、野間のことを想いながら作つたものであ

## 野間村—文化工作隊

野間村へは、党的文化工作隊が三回程行ったことがある。それは一九四八年（昭二十三）から一九五一年（昭二十六）にかけてである。この工作隊には、河田賢治氏、春藤誠一氏（五〇年闘争後党から脱落）なども参加していた。いま思い出すと実に大胆で、勇敢な行動であったと思う。文化工作隊は十一名で編成されていた。

この文化工作隊が、丹後の橋北地方、伊根、朝妻、本庄、筒川、日ヶ谷、と廻ったことがある。その時の話であるが、地図を見て、日ヶ谷から野間までは峠を一つ越えれば簡単に行けると信じ、隊員の十一、二名は朝早く日ヶ谷道を出発し、峠に向かって歩いた。ところが途中で迷い、行けども行けども目的の部落がみつからないので途方にくれてしまった。やむを得ず、原始林のような山を下り、川のあるところまで出て川の中を歩いた。ところが先頭を歩いていた者が、「この下は滝になつてゐる」と、大声で叫んでいた。われわれは滝の上に集まって相談した。結論はこの滝をなんとかして

滝まで降りた。滝壺の水は胸のあたりまで降りた。

こんな冒險をやつて川の岸に登ると人が歩ける道があつた。これを見た時は全員声をはずませ、元気をとりもどし、目的地の野間小学校に向かって歩いた。その晩、演説会のあと村の人々にこの話をすると村の人々が驚き「あの滝から上（かみ）に登った村人はこの村にもおらない」と聞かされ、われわれは吃驚したことがある。あとでさくとこそこは本当に原始林で、大鼓山（六八三）とよぶ山であった。

私は、野間へ行く時は、弥栄町の溝谷から等樂寺、畑、吉津を経て野間の味土野一畠（ここに洞養寺がある）へ行つたものである。ある時は、小杉部落（現在は廃村、その頃は五、六軒農家がある）を通つて世屋村の木子に出でて、党的座談会を二回もつたことである。この道は実際に美しい山路である。この道は戦後すぐここに設けられた。細見幸基氏（現福知山市会議員）であった。党の中丹地区委員会の事務所は、戦後すぐここに設けられた。細見幸基氏の嚴父の細見文治氏は戦前からの活動家で、戦前地方新聞等も発行しておられ警察権力の弾圧を幾度も受け、タイホもされたこともある。また、労農党の運動もやまで行って、そこで地区全体会議に参加して、文化工作の成果を報

降以外にないときより、かずらのつるをつなぎあわせそれで滝壺まで降りた。滝壺の水は胸のあたりまで降りた。

ところで、ここで書きとめておかねばならぬのは、この野間村へはいるところに黒部があるが、この黒部部落はあの文芸評論家の平林初之輔氏の出身地である。彼のことについては、また後日記することにする。

この文化工作隊のことについては次の機会に書くことにして、つぎにいくことにする。それは記憶をとりもどすためである。

かねばならぬのは、この野間村へはいるところに黒部があるが、これはいるところに黒部があるが、この黒部部落はあの文芸評論家の平林初之輔氏の出身地である。彼のことについては、また後日記することにする。

私が福知山へ行つたのは一九四七年（昭二十二）頃であつたと思ふ。細見氏の家の台所で幸基氏と話をしていて、静かに部屋にはいつてこられた小柄なこの細見文治氏にはじめてお逢いしたが、口数の実にすくない人で、権力に度々弾圧されながらも、屈服されなかつた鬪士とは全然思われない温順な人柄であった。その後、細見氏の家を度々訪ねることがあるが、この細見文治氏が堂々たる文章家であること、また、若い頃から地方の政界で活動したり、地方新聞を発行して度々弾圧をうけられた人であることを知つて実に驚いた次第である。私はまた、谷口善太郎氏の胡麻での生活の有様や人柄もこの細見文治夫妻から聞かれた。台所で幸基氏と話していくなか文治氏がはいられ、福知山を中心に、上豊富や、中六人部のことをいろいろと話された。その結果、私は上豊富と、中六人部に

丹後の野間村から、私は（一九四六年秋〔昭二二〕）、中丹地方の福知山市の西にある上豊富村石場部落へ行つた。この村へ行つてほしいと話したのは細見幸基氏（現福知山市会議員）であった。党の中丹地区委員会の事務所は、戦後すぐここに設けられた。細見幸基氏の嚴父の細見文治氏は戦前からの活動家で、戦前地方新聞等も発行しておられ警察権力の弾圧を幾度も受け、タイホもされたこともある。また、労農党の運動もやまで行って、そこで地区全体会議に参加して、文化工作の成果を報

られた人で、山本宣治を福知山に迎えて、大演説会をやられたことがある。また山本宣治の最後の演説会になる大阪へ行く前夜、福知山で大演説会をもつているが、この演説会は、細見文治氏が主催されたものである。

はいることにした。まずさきに上豊富について書くことにする。

上豊富の石場部落の本田弥一氏を訪ね、その晩、四、五人の若い人々と話をした。その時の話はやはり、農民の生活が中心であった。

この上豊富は、丹後の野間村と違つて耕地は広々としていたが、供出米の割当ては厳しく、ここでも飯米を確保することが大変であった。また、現金収入は少なく、収穫がすぎると出稼ぎに兵庫県へ寒天作りに、あるいは京都伏見へ酒造りにでかける農民が相当にいることを教えられた。この出稼ぎは、さきの野間村の場合でも同じであった。また福知山の国鉄労働者になっている者がこの村では多く、どこの農家でも、長男は農民で、次男、三男は、国鉄労働者になっていた。この点は、野間村とは大きな違いであるが、農民のくるしい生活はおなじであった。

この村にも、その後社研が組織され、つづいて党支部が確立し、さらに日農支部ができた。その動機は供出問題と税金問題であった。

この上豊富でいつも訪ねるのは前に述べた本田弥一氏の家であつた。彼は純粹の農民でいつも野良着を着ていた。年は若く逞しい

風貌であった。いくたびに新しい質問をして私を悩ましたものである。あるときは、「最近本屋にならんでいるエロ本を、党はどう説明するのだ」といったことがあら。それに私は、性科学の問題は、農民指導者であり、国會議員であった山本宣治先生の本を読んだらよいと答えたり、文化問題の面では反動政府は不健全で、民族性を失ったアメリカ一辺倒の文化性を日本民族に押しつけていた。そのため党は、日本民族の自主的で独自性のある文化、人民の要求する文化を創造しようと努力している。エロ・グロの文化は、労働者、農民の魂を支配者や搾取者に有利にするために作りだされたペテンの文化政策であり、阿片的文化政策であると答えたこともあった。

その頃、文化の分野では、田村泰次郎、織田作之助等の肉体派文學が時代の脚光をあびかけていた。またエロ・グロの雑誌が店頭に出ていた。しかし同時に、宮本百合子の『播州平野』、徳永直『妻よねむれ』などが発表されていた。

この村を訪ねると、近所に住んでいた本田実氏（現在紫野診療所）で前に日農京都府連の書記

として一時期活動していた）と、他にもう一人の青年がかならず集まつて、その頃に起きていた重大な問題について、夜明まで炬燵にあたりながら語りあかしたものである。こうした話し合いは日がたに活発なものになり、それが党細胞に発展したのである。ここで書きとめておくがこの村へは、私より以前に、西口克己氏や小島とみ氏らも訪ねていたことがあとでわかった。また私は、野間細胞の活動ぶりをここでよく話した。すると自発的に、いろいろの活動の方針を打ち出し、自主的に、活動を若い人々は始めたものである。だがこここの細胞がもつとも活発に闘争したのはつぎのことであった。一九四八年（昭二三）、芦田内閣が外貨導入政策をうちだし、税の收奪を強行したためにおきた全国的な規模でなされた反税闘争の時期であった。

中六人部村は、福知山から園部町に出る山陰道を南へいり、長土師川の橋を渡ると中六人部である。この村から昭電疑獄事件で崩壊した芦田均が出身したのである。村の街道を歩いていると、右手の田圃のなかに白壁の倉がいくつかならんでいるが、そこが芦田均の家で実際に立派なものである。私の目的は中六人部田野部落であった。そこには戦前農民運動をやっておられた北山与氏が住んでいた。北山氏は温和な人であったが、なかなか骨のある人物で、部落でも信頼され部落長をやっておられた。一晩そこで世話をになり、その晩、農民五、六人と懇談したが、この村でも重税と強制供出問題が話の中心であった。またこの村には三菱財閥の広大な山林があり、部落の山林は非常に狹少なものであった。農民の話では、この木材は三菱財閥系列のパルプ工場にどんどん出されているとのことである。さらに三菱の山林はこの部落の隣にある兵庫県の岩戸部落まで拡がっているとのことである。この山林問題も話題になり、山林原野の完全解放を無視した農地改革の欠陥をここで見ることができた。

後度々、すくなくとも月に三回は  
はいって、その都度農民との懇談  
会を、北山氏の家でもつたり、あ  
る時は部落の集会所でひらいた。  
私がはじめて行つた頃はまだ組織  
は確立していなかつたが、やがて  
確立し有能な人々が集まつてい

野間、上豊富は若い人々であつたが、ここでは一家の主人が党を組織して日常活動をおこしていつたのである。飯米闘争から強制供出米反対の闘争、つづいて税闘争であった。福知山市内におきた税闘争の際、ここでも村長も参加して税闘争がやられ大きな成果をあげることができた。また、党組織の確立とともに日農支部も結成されたのである。北山与氏は日農の執行委員になり、その後長い期間日農の執行委員をやっておられたのである。現在は北山与氏の息子さんが農民運動の第一線で活躍されていると聞いている。

芦田均不正農地摘発鬪争

ところで、福知山の税闘争が終つたあと、多分七月頃だったと思ふ。関西の赤旗総局の吉本記者とともに、中六人部田野部落での農

「に出席するためにはこの村に  
はいった時、吉本記者が「あそこ  
に見える、大きな邸<sup>邸</sup>はだれのもの  
ですか」と訊ねた。「あれが芦田均  
の家だ」とこたえた。そこで二人  
はなにげなく、「一寸と役場で芦田  
均の土地を調べてみようか」と言  
うことであつた。そこで役場へ行つて土地台帳を  
みたところ、芦田均の土地は、農  
地解放の対象からはずされて、完  
全に昔のまま残されていたのであ  
った。

「に出席するためにこの村にはいった時、吉本記者が「あそこにある大きな邸<sup>邸宅</sup>はだれのものですか」と訊ねた。「あれが芦田均の家だ」とこたえた。そこで二人はなにげなく、「一寸と役場で芦田均の土地を調べてみようか」と言うことであつた。役場へ行つて土地台帳をみたところ、芦田均の土地は、農地解放の対象からはずされて、完全に昔のまま残されていたのである。

開催されたのである。この摘発闘争の大会ビラは、全村に配布され、夜の大会は中六人部小学校はじめての超満員であった。この大会には河田府委員長も演壇に立ち、きびしく芦田首相の農地不正所有を追及したものである。

大会のあと、ただちに中六人部村農地委員会に決議文が手渡され、芦田均の農地は解放されたが、農地改革が前進しているといわれるなかで、こんな驚くべきことが実際にあったのである。ところが、今から四、五年前、日農結成五〇周年にあたって全日農京都府連が年表作成を計画し、宮津市喜多におられる中嶋利雄氏がこの作成に努力しておられたとき、私に「芦田均の不正農地を摘発したことは耳にしているが、京都府庁の農地委員会で調査してもその証拠がない」と話されていたことがあります。私は「そんな馬鹿げたことはない。これを摘発した証人は中六人部村にも沢山いる。また、現に私がここにおるよ」といったことがある。当時の京都府知事は木村惇であった。

を守るために、改革をいろいろのかたちで妨げていたのである。そのころの市町村の農地委員会の構成をみると、小作五、地主三、自作農二の比率であり、一九四六年の第一回農地委員の選挙で成立した委員会の会長には、全国的にみると地主が小作をぬいて三九パーセントも占めていたのである。さらに翌年の四七年一月、都道府県の農地委員会の選挙があり、三月には第一次の買収計画がきまつた。京都府においても三月三十二日から買収が開始されている。全日農京都府連が作成した年表のなかに、その頃の農地委員会のことについて次のようにでてている。

「京都府下農地改革は戦前農民組合がつよかつたところは順調に進んでいる。買収は昭二二、三、三一一昭二七、九、一までかかつているが、昭二四中に九割方済んでいる。五〇町歩以上地主は四人しかなかつた。農民組織の進んだ地方の農地委員構成の例、南桑篠村農地委員、地主三、小作五、自作二、(これが小作から出ている)」。この例は前に書いた全国的比率と同様である。

ところで、この芦田均の不正土地所有は、農村のなかに残存して

いる封建性残滓を露骨にあらわしたものである。農地改革は天皇制と強く結びついていた地主制度、この制度によって、天皇制は、成立していたのであるが、その土地制度を撤廃する農地改革を当時の政府や地主勢力が妨害することがあっても、農民自身が農村の民主化を進めるうえで、重要な役割をはたす農地改革を、厳しく監視することをさけたことは実に残念なことである。それには農地委員会の構成そのものにも大きな問題があるが、封建的な地主の圧迫と断固として闘うべきことであったと思ふのである。中六人部村において、この不正土地所有が摘発できただけな力は、党組織ができ、日農組織が確立し、農民自身が闘うこと自覚したことが根本的な力があつたと信じている。この闘争のあと中六人部の党組織と日農組織は大きな前進をしたのである。

つぎに余談であるがおもしろいことを書いておくことにする。それは、党の不幸な五〇年問題——主流派・国際派にわかつて党が分裂状態——が解消され統一した直後、私は、この中六人部に行つたことがある。数年振りに、私は田野の北山氏の家で十名程の人々と会つて

懇談会をもつた。その時、ある人が、「品角さんとは実にながいあいだ本当にあわなかつたが、一体今まで何をやつていた」とたずねた。「私ははずうと党活動をやり、また絵を描いていた」と答えると「あんたはもう死んだと聞いていた」と話し、私は吃驚したのである。「ところで、あんたが死んだと聞いてから、時々思い出していたことがある。それは、あんたは夜この村へくるときはかならずインターか赤旗のうたをうたいながらわしの家の前を通つて行つたものだ。

だからあの頃は、品角さんが来たなーあすの晩は細胞会議があるなーと思った。だからあんたが死んだと噂を聞いた時、もうあの歌は聞かれんなーと思ったものだ」といつてニコニコしながら、私の顔をながめていた。

不幸な党の分裂までは、天田郡のなかでもとくに大きな党組織があり、北山、竹内氏等々を中心とし、農民の要求をかかげて、つねに活発な活動をつづけていたものであった。だがそれが、五〇年問題のあと行つた時には、三、四名になつていたのには實に驚いたのである。だから数年振りに出会

ったこの懇談会で集まつた人々に再入党を奨めたものである。このことがあって以後しばらくこのことがあつて以後しばらくこの人々と再会することがなかつた。今まで何をやつていた」とたずねた。「私ははずうと党活動をやり、また絵を描いていた」と答えると「あんたはもう死んだと聞いていた」と話し、私は吃驚したのである。「ところで、あんたが死んだと聞いてから、時々思い出していたことがある。それは、あんたは夜この村へくるときはかならずインターか赤旗のうたをうたいながらわしの家の前を通つて行つたものだ。

だからあの頃は、品角さんが来たなーあすの晩は細胞会議があるなーと思った。だからあんたが死んだと噂を聞いた時、もうあの歌は聞かれんなーと思ったものだ」といつてニコニコしながら、私の顔をながめていた。

不幸な党の分裂までは、天田郡のなかでもとくに大きな党組織があり、北山、竹内氏等々を中心とし、農民の要求をかかげて、つねに活発な活動をつづけていたものであった。だがそれが、五〇年問題のあと行つた時には、三、四名になつていたのには實に驚いたのである。だから数年振りに出会

下六人部の開拓農場

歩兵第二十聯隊の演習地の跡である。一九四五年十一月九日の閣議は、第四次食糧増産計画を決定し、五ヶ年計画で一五五万町歩の緊急開墾事業をはじめたのである。

政府はこの開拓事業に、失業者、労働者、それに復員してきた帰還兵士に援助するからといって、農民の要求をかかげて、つねに活発な活動をつづけていたものであった。だがそれが、五〇年問題のあと行つた時には、三、四名になつていたのには實に驚いたのである。だから数年振りに出会

いた。その物置のような家が二〇戸程あつた。そのなかの一軒を訪ねて、開拓農場の責任者の人の家をおしえてもらつた。ここに入植者は帰還兵であった。責任者は陸軍の下士官出身であった。ここに開拓農民として根を下ろしたが、政府の援助は雀の涙程で家族が喰つていけないのが実情だ。肥料もロクに手にはいらず、こんな荒地では米も麦もとれない。水の便もなく、ここで収穫されるのは大豆と薯だけである。これではどうすることもできない。電灯もなべ、ランプの生活で、風呂もドラム缶だ。こんなことをぼつぼつ話してくれた。私が農民組合のことや、共産党の話をすると頭から「アカはきらいだ」と話した。そう答えるその責任者のうしろの壁には、天皇と皇后の写真と小さな日章旗が飾られてあったのが、今でも強く印象に残っている。

この長田野開拓農場にはいった後日、私は、久世郡城陽町の長池



同じことを聞かされ、おなじ生活状態をみたのである。このことがあって、その後も二、三回訪ねたが、以前とおなじことであったで、それから以後は開拓農場に行かなかつた。さらに船井郡胡麻にも開拓村があつたが、ここは軍人出身の人々でなく、谷口善太郎氏や貴司山治氏等が住んでおられた。また、三宅英雄氏（日農京都府連執行委員）もおられたところである。三宅英雄氏には南桑、北桑方面を襲つたヘスタ台風の時には、胡麻農民組合から救援物資を大量に、現地に救援隊を組織して送つてもらつたことがある。

貴司山治氏とは、七条新町下る元木旅館（現在の新町会館）で二度程度会つて、日農の話をしたことがあつた。

（以下次号）

第六九号（P8）八七・一〇・三〇刊  
郷土の大先輩松尾直義氏をめぐる人々（佐渡一郎）、本会の元代表世話人住谷悦治先生を悼む（品角小文）、信念と忍耐と勇気の入住谷悦治先生（稻田達夫）、住谷治先生を悼む（岡谷元治）、住谷悦治先生を偲ぶ（湯浅貞夫）、反骨の人和田孝英氏（小山真一）、目で見る京都の民主運動史・丹後織物労働者の闘い（湯浅貞夫）、詩・運動会（服部）、詩・北辰さゆる（某）、編集部だより

第七一号（P8）八八・三・一五刊  
表紙（公道画）、自然を大切に（佐伯快勝）、住谷、滝川先生の思いで（浅川亨）、向仲寅之助のこと（和久田幹夫）、短歌（全学協議会においてー松丘子）、諸集会おしらせ、事務局だより（領收

（次ページ）

## 『燎原』総目次(五)

書にかえて)

### 第六七号～七八号

#### 第六七号 調査中

#### 第六八号（P8）八七・八・二〇刊 戦前の南桑河原林村の農民闘争ー

沢田治三郎の聞書（奥田修三）、片山潜の郷土を訪ねて（西村清三）、明日で見る京都の民主運動史・壳春防止法（湯浅貞夫）、残暑お見舞い申上げます（細野武男）、短歌（二条静子）、漢詩（小山独歩）、領収書にかえて

元木旅館（現在の新町会館）で二度程度会つて、日農の話をしたことがあつた。

（以下次号）

第六九号（P8）八七・一〇・三〇刊  
郷土の大先輩松尾直義氏をめぐる人々（佐渡一郎）、本会の元代表世話人住谷悦治先生を悼む（品角小文）、信念と忍耐と勇気の入住谷悦治先生（稻田達夫）、住谷治先生を悼む（岡谷元治）、住谷悦治先生を偲ぶ（湯浅貞夫）、反骨の人和田孝英氏（小山真一）、目で見る京都の民主運動史・丹後織物労働者の闘い（湯浅貞夫）、詩・運動会（服部）、詩・北辰さゆる（某）、編集部だより

#### 第七〇号（P12）八八・一・二〇刊 表紙（徳叟山人畫、梅田晶三画）、

一九八八年年頭所感（塩田庄兵衛、細井友晋、稻田達夫、安井真造、福岡精道、市田忠義、井上喜代松）、聞きがき「府下で最初の社会主義者ー岩崎革也の軌跡」（湯浅貞夫）、卒寿の須藤五郎さん（小山真一）、短歌（年頭の祈りー田畠忍、時事偶詠ー黒田了

一、新春歌壇ー須藤五郎、国会にてー小笠原貞子、春のきざしー横田川潤一、倉敷紀行抄からの連想ー松岡正美、古里の同窓会にてー二条静子、雜詠ー内藤利子）、漢詩ー偶感（独歩）、事務局だより（領収書に代えて）

第七三号（P8）八八・七・三〇刊  
表紙（市美術館、永原誠画）、故木村京太郎さんと「燎原」（稻田達夫）、細川、齊藤、清水三氏の御冥福を祈ります（湯浅貞夫）、私の生いたちと活動ー戦前の社会大衆党员（枝浪真太郎）、目でみる京都の民主運動史ー民主的移動映画の運動（湯浅貞夫）、短歌（松丘子）、漢詩（独歩）、事務局だより

## 第七四号 (P8) 八八・一〇・三〇刊

表紙（永原誠画）、戦前の婦人同盟のこと—斎藤はるおさんに聞く（聞き手湯浅貞夫）、戦時文化統制の中での或る一こま（故品角一郎）、最後の府会（浅川亨）、誌友だより（村中嘉明）、天皇問題寄稿おねがい、短歌（ふるさとをたずねて一二条静子）、事務局だより

## で見る京都の民主運動史 (41) 京都の民主商工会の結成（湯浅貞夫）、船屋むかしま（和久田幹夫）、御冥福を祈ります—故井上喜代松氏、故児島とみさん（編集部）、短歌（おりにふれて一一条）

## 会員・誌友の皆さんへ

## —金権腐敗・暴力団癒着へのいかり—

いつも「京都の民主運動史を語る会」に協力支援をいただき、厚く御礼申上げます。

さて昨今の佐川金権、暴力団癒着事件は戦後最大の政治腐敗事件で、日本政治の現状を天下に露呈しています。国民の怒りは全国に拡がり、真相究明と政治の一大変革を要望する声は、津々浦々にみち満ちています。

会員皆さんの声を『燎原』に掲載し、国民世論の高揚と自民党政治のワク組をかえていく力にいたしたく、是非、皆さんのご投稿をお願いいたします。

## 第七七号 (P8) 九〇・一・一五刊

表紙・短歌—人生行路（故永良巳十次）新年所感 マルタ会談と安保条約（細井友晋）、怒りを爆発させたい（品角小文）、「世紀末」を

迎える（藤谷俊雄）、東ヨーロッパでの体験から（塩田庄兵衛）、激動の時代—地方自治の原点にかかる（稻田達夫）、今、問われているもの（市田忠義）、「燎原」創立者の一人北牧孝三さんを偲ぶ（湯浅貞夫）、京都府戦前の農民運動—泉隆の聞書（一）（奥田修三）

## 記

一 テーマ 佐川事件におもづ  
二 字 数 六〇〇字～一〇〇〇字  
三 メ ケ 切 九三三一月一〇日（一月発行号掲載予定）  
四 送り先 「燎原」編集部  
611 宇治市広野町寺山一七一五七  
奥田 修三方

## 第七五号 (P8) 八九・一・三〇刊

表紙（水墨・小文画）、天皇問題について（藤沢薰、後藤靖、細井友晋、市田忠義、岩井圭子、寿岳章子、小笠原貞子、岡谷実、重本健治、塩田庄兵衛、橋睦子、梅田勝）、「今天皇制を考える」を読んで（渡部利弘）、私は天皇歓迎式に反対しました（湯浅貞夫）、天皇問題について（村中嘉明）、短歌（自画像—黒田草舟、賀春—松丘子）

## 第七六号 (P8) 八九・四・三〇刊

表紙（水墨—小文画）、あれから四十年レッドパー時（塩田庄兵衛）、私の戦前・戦中・戦後（重本健治）、山本宣治生誕一〇〇周年にあたって（品角小文）、劇画山本宣治について（佐々木敏二）、目

## 第七八号 (P8) 九〇・一〇・一五刊

表紙（スケッチかも川、短歌二字）

首一山下正子）、京都府戦前の農民運動—泉隆の聞書（二）完）（奥田修三）、目で見る京都の民主運動史（42）、戦後発展した地方史の研究（湯浅貞夫）、「燎原」総目次（二）

☆ 故品角一郎氏の「農民運動散歩記」（二）を続載します。原稿にはありませんが、適宜、小見出し、を編集部でつけました。

☆ 右のように、佐川事件に関する会員の皆さんの声を新年発行号に特集掲載したく思います。ふるての御投稿お願いします。

☆ 一月新年号に会費払込の振替用紙を同封させていただきますので、よろしくおねがいいたします。

☆ 会や本誌のことについては、編集部担当の奥田修三（宇治市広野町寺山一七一五七）、湯浅貞夫（京都府船井郡日吉町保野田）の両名のいずれかにご連絡下さい。